

## 放送通訳における同時通訳と時差通訳の比較

稲生 衣代<sup>1</sup> 河原 清志<sup>2</sup>

(<sup>1</sup> 青山学院大学 <sup>2</sup> 東京外国語大学)

*When interpreting world news, NHK BS-1 has mainly relied on prepared interpreting. However, due to improved interpreting skills and broadcast technology, they have started to utilize simultaneous interpreting for regular news programming. Although it is a very small step, it has significant meaning in the world of broadcast interpreting. This article examines the differences in simultaneous interpreting and prepared interpreting by analyzing actual interpreting data.*

### 1. はじめに

本稿は、NHK 衛星放送 BS-1 で放映されている米国 ABC ニュースの同時通訳と時差通訳における通訳パフォーマンスの差異について、訳出結果から得られた言語データをもとに、比較対照するものである。

放送通訳と言えば、視聴者にとって聞きやすいディリバリーおよび正確性を確保するためにある一定の時間をかけて訳出し、ボイスオーバーする通訳と翻訳の間に位置する訳出手法である「時差通訳」が一般的だと受け止められているであろう。実際、NHK BS-1 では、英国 BBC、ドイツ ZDF、韓国 KBS、カタール・アルジャジーラ、中国 CCTV など多くの言語のニュースが扱われ、主に時差通訳の形式で二ヶ国語放送にしている。NHK ではこれまで時差通訳の利点といえる、正確で聞きやすい日本語を優先してきた (BS 放送通訳グループ, 1998; 木佐, 1993)。その NHK で、2006 年 11 月から ABC ニュースを同時通訳で訳出するスタイルがとられるようになった。これまでは事件や事故などの海外で重大なニュースが発生した時にのみ同時通訳での二ヶ国語放送を提供する傾向にあったため、これはニュースを扱う放送通訳の世界においてはかなり注目すべき状況である (稲生, 2007a)。

放送通訳では、当初、冗長な部分がなくコンパクトに情報がまとめられているニュースレポートの同時通訳はかなり困難だと受け止められてきた。しかし、ニュース専門チャンネルの CNN や BBC では現在、同時通訳が主流になっている。このようなニュース専門チャンネルでは、海

外からのニュース放送を日本でそのまま編集などせずにリアルタイムで放送するため、再放送の番組以外は時差通訳で対応するわけにいかず、基本的には同時通訳で処理している。

同時通訳の多用化が進む放送通訳の世界で、NHK でも速報体制中ではなく、平時のニュースでの同時通訳の導入が可能になった理由については、「放送通訳者の同時通訳スキルの向上」および「放送技術の発達」の 2 点があげられる(土屋, 2007)。本稿では、「放送通訳者の同時通訳スキルの向上」の側面を、同時通訳と時差通訳の通訳パフォーマンスの結果から得られた言語データをもとに両者を比較対照し、準備時間が長い時差通訳と比べて同時通訳がいかに質的に時差通訳に匹敵するレベルに高まっているかを分析する。

## 2. 放送通訳における同時通訳導入の背景事情

まずは放送通訳者の同時通訳スキルの向上について考えてみよう。これにはいくつかの理由が考えられる。最初の湾岸戦争の際は放送通訳者数が限られていたが、放送通訳というジャンルの確立に伴い、放送ジャーナリズムのルールを踏まえた上で通訳にあたる放送通訳者が増え、2001 年の同時多発テロや 2003 年のイラク戦争などの緊急時には放送通訳業務を中心にする通訳者が同時通訳の多くをこなすようになった。

前述したように CNN や BBC などが時差通訳体制から同時通訳体制へ変わり、長時間にわたり、主に同時通訳で二カ国語放送を提供するようになったため、普段から、放送の同時通訳に携わる通訳者が多くなり、難解だと評されてきたニュースリポートの訳出に慣れ、そのスキルを習得できるようになった。

NHK で同時通訳が可能になった背景には技術的な理由もあった。海外のニュース番組にはコマーシャル部分があることが多く、その箇所をそのまま放送するわけにはいかず、カットするための編集時間が必要であった。ABC の同時通訳導入に伴い、収録しながら編集・送出しが可能なディスクレコーダーが使用されるようになった。これまで緊急放送で使用されてきたこのハードを導入したおかげで、瞬時に編集して放送することが可能になった。このようにして、通訳および放送の技術が共に向上したために ABC の同時通訳が可能になったといえよう。

米国の東部時間 18 時半に放送が開始される ABC を代表するニュース番組の「ワールド・ニュース」は、日本では少し遅れて放送がスタートしている。そのため、通訳者がブース内で事前に一度放送を見られることが多い。通訳者は数字などのメモをとるノートテイキングの機会が得られる。時差通訳のように何度も聞きなおし、じっくり訳文を作る時間などは到底ないが、一度でも事前に見られるため、ある一定の正確性を確保した通訳を行うことが可能になっている。

また、NHK では ABC ワールド・ニュースを再放送しているが、そのまま同時通訳版を放映することなく、訳出のために一定以上の時間をかけてからボイスオーバーする時差通訳形式で放送通訳を流している。そのため同時通訳の放映後、同じ通訳者が時差通訳のための準備を進めることになる。ニュースには何よりも正確性が求められるはずであり、通訳形態の特性を把握した上で、同時通訳よりも正確で聞きやすい時差通訳版をも制作している点は大いに評価すべきであろう。

### 3. 放送通訳における同時通訳の困難さの要因

ニュースリポートにおいて、同時通訳が時差通訳と比較して正確性を確保しにくい主な理由として、訳出対象テキストが練り上げられたニュース原稿であるという点が挙げられる。たとえばインタビュー番組を訳す場合には、発話に冗長な部分があるため、瞬時に無駄な部分を削ぎながら同時通訳するという訳出戦略がとれる。スピーチを読み上げる演説の場合でも、ある程度話の流れを予測しながら進めることが可能である。それと比較しニュースリポートは記者が推敲や編集を重ね、無駄な部分をなくし、2分前後に凝縮したものが多く、一瞬にして意味内容を完全に把握することは難しい。

放送通訳の場合、通訳の聞き手は主にテレビ視聴者であるため、会議通訳のように聞き手の反応が見えるわけではなく、どのような訳出戦略をとればよいのか迷うことがある。放送通訳の聞き手は会議通訳の聴衆のようにヘッドホンをつけているわけではなく、お茶の間で聞くことも多いので、会議と比べてそれほど通訳内容に集中して耳を傾けているわけではない。そこで同時での放送通訳では、起点言語をある程度編集して時差通訳に近い形の訳出を行い、視聴者にわかりやすい訳出を心がける必要がある。専門家が参加する会議通訳では、できる限り多くの情報の訳出を希望する参加者が多いことも考えられるので、発話者が発した情報に圧縮・削除などの編集を加えることはせず(下記の即応方略)、聞き手に訳出結果から得られる情報から取捨選択して内容を理解してもらうほうが良い場合も十分に考えられる。

以上、訳出対象テキストには冗長性が少ないことと、視聴者宛てにある程度の情報編集作業が必要な通訳であることの2点から、放送における同時通訳は時差通訳に比べ、かなり困難をともなった通訳形態であると言える。

但し、上述のとおり同時による放送通訳では、メモをとるチャンスがあるため、果たしてこの訳出手法を「同時通訳」と定義づけられるのか疑問が起ころうかもしれない。しかし、会議や講演会で事前にスクリプトを入手した上で同時通訳をすることはよくあることであり、スクリプトがない場合でも、通訳者には予め通訳すべきテーマなどが伝えられているはずである。全く何のヒントもないまま、同時通訳する事例はごくわずかだと考えられる。そのような状況を受け、本稿が扱うABCワールド・ニュースの通訳は、事前に一度聞く機会はあるものの、ある程度の時間を得て自分のペースで聞き直しながら細かいメモあるいは翻訳原稿を作って本番の際に読み上げる時差通訳とは全く異なるため、「同時通訳」の範疇に収められると考える。また、必ずしも毎回一度聞けるというわけではなく、番組における同時通訳者3名のうち最後の担当者は一度も聞けずにそのままリアルタイムで訳出する場面も見られるので、その部分は完全に生同時通訳になる。

以上より、放送通訳における同時通訳は時差通訳に比し困難さが多い要因が確認された。では、両者にはいかなる差異があるか、同一のニュースを対象にした具体的な訳出結果から言語データを取り出し、両者を比較してみよう。

### 4. 放送通訳の先行研究と同時・時差の比較基準

まず、放送通訳における同時通訳と時差通訳を比較するにあたり、比較の基準を設定する

必要がある。この点、いくつかある日本における放送通訳の先行研究を検討し、そこから同時通訳と時差通訳を比較するのに有効である項目を抽出し、さらにそれを比較の基準として再構成してみよう。その際に注目すべきは、BS 放送通訳グループ(1998: 141)が掲げている

- 原則 1: 聞いてわかりやすい日本語を使う
- 原則 2: 映像と言葉の対応を維持する
- 原則 3: 原文のコミュニケーション機能を維持する

の3つである。これがどのように具現されるか、以下の先行研究から見てみよう。

#### 4.1 放送通訳の先行研究

日本における放送通訳の先行研究は大別すると、(1)社会的側面に焦点を当てた放送通訳の社会的受容・変遷・形態に関するもの(柴原, 2003; 稲生, 2003, 2007a, 2007b)、(2)言語的側面に焦点を当てた放送通訳の明示的・黙示的準則ないし方略に関するもの(鶴田, 1997, 2004; 小倉・三島, 1999; 西村, 1999; 三島・小倉, 2000; 花岡, 2000)、そして(3)視聴者の側面に焦点を当てた聞き手にとっての聞きやすさや問題点に関するもの(貝瀬, 1993; 木佐, 1997)の3つに分けられる。本稿は専ら通訳対象テキストの言語的側面から分析を行うので、(2)を手がかりにしたい。

(2)の中で放送通訳のうち時差通訳の言語的側面としてそのストラテジーを包括的に扱ったものは、西村(1999)である。同論文は時差通訳の分析として、①機能的通訳翻訳理論の視点と、②編集方略の視点からのテクニックを挙げている。①についてはその提唱者である水野(1997)によると「機能的翻訳理論は、意味や文法に基づく翻訳理論と文化的要因を重視する翻訳論」の「2 つをつなぐ結節点に位置し、総合的な翻訳理論の中核をなすものだろう」(水野, 1999: 50)とあり、放送通訳も広義の翻訳(Translation)である以上、この考え方は同じく当てはまる。西村(1999: 73)もこの点、「通訳・翻訳においては、ことばひとつひとつの意味やシンタックスを重視する翻訳理論から離れ、文脈を把握しながら、具体的な表面構造の特徴を手がかりにしてテキスト全体の内容を翻訳しようという主張」としてこの立場から分析を行っている。その具体的な内容は、BS 放送通訳グループ(1998: 147-169)と水野(1997)を加味すると、以下の8つが挙げられる(なお、Baker, 1992: 119-216)。

- (1) 情報の重要度を再現する(importance)
- (2) 文の焦点を再現する(focus)
- (3) 原文の流れに沿った訳を心がける(linearity)
- (4) 言葉と言葉の関係、文と文の関係を再現する(cohesion)
- (5) 論理的つながりを再現する(coherence)
- (6) 旧情報－新情報の流れを再現する(given-new information)
- (7) 主題－題述の流れを再現する(theme-rheme progression)

## (8) 前景と背景の関係を再現する (foreground and background)

これは通訳・翻訳は「オリジナルの言語と目標言語の間で引き裂かれながら、原文を裏切ることなく、しかも日本語として受け入れられる訳文を求めていくプロセス」(BS 放送通訳グループ, 1998: 147)であり、「原則 3: 原文のコミュニケーション機能を維持する」上で不可欠な準則といえる。また、特に原文の流れに沿うことは、原文のテキスト情報と映像とを対応させることになり、「原則 2: 映像と言葉の対応を維持する」にも適う(なお、藤濤, 2007: 122-123)。

ところが、もうひとつ大切な点がある。それは上記②「編集方略の視点」である。これは「原則 1: 聞いてわかりやすい日本語を使う」を重視するもので、これは三島・小倉(2000)が主張する放送通訳におけるノイズの処理といえる。これには(a)訳出量ノイズと、(b)文化的ノイズの問題の2つがあり、視聴者にわかりやすい通訳パフォーマンスを実現するには、放送通訳者はこの2つのノイズを除去する編集者としての役割を担っていると考えられる。その詳細は以下の通りである(14項目を並列列挙している小倉・三島, 1999も同様の内容を扱っている)。

- I. 情報の省略・圧縮…①情報の圧縮、②省略、③サウンドバイト(ニュースに引用される政治家などの短い発言)の特別処理、④映像からわかる場合の省略、⑤体言止め(但し、頻繁に使うことは戒められている)、⑥日本人視聴者には重要ではない情報の省略、⑦文の前後関係を見て **redundancy** を省略する
- II. 表現の入れ換え…①より一般的な表現への言い換え、②定訳の使用、③代用、④漢語表現による言い換え、⑤具体的な語で表現する、⑥日本語として自然な構文
- III. 情報の追加…①固有名詞などの説明、②接続詞の付加、③明確化のための付加
- IV. 再構成

これを敷衍して検討してみよう。まず(a)に関して(上記 I. に対応)は、第3節でも述べたように、放送通訳の名宛人であるオーディエンスを考慮すると、訳出率をある程度抑える必要がある。木佐(1993)は、訳出時の適正速度を保つには、理想的には7割、実際には8割の訳出率にすべきであると、放送通訳の受け手調査から結論づけている。この訳出率を実現するには、訳文の短縮や省略の技術が必要で、BS 放送通訳グループ(1998: 169-174)は以下の6つの方法を挙げている(この点、「凝縮化」や「縮小」につき、花岡, 2000; 藤濤, 2007: 121-122)。

- a. できるだけ短い訳語を選ぶ(ただし難しい漢語や同音異義語は避ける)
- b. 英語では文法上不可欠の要素であっても、日本語では省略が許される、あるいは表現しなくてもよい要素を省く
- c. 情報の重複やくり返しなど、オリジナルの **redundant**(余分)な表現を見つけて省く
- d. ニュースの形式的な要素を省略する(ニュース末尾のリポーターの名前や地名)
- e. 映像と自然音(背景音)だけの部分を利用して訳を詰め込む
- f. より一般的な表現で言い換える

また(b)に関しては(上記 II.に対応)、オーディエンスを考慮して起点言語文化との差を埋める編集作業がある程度必要で、これは機能的翻訳理論(藤濤, 2007)で扱っている翻訳における註の機能とある程度平行に考えることができる。この註の機能には、①起点テキストの概念や訳語の理解のために異言語文化の差を埋めるというコミュニケーションの断絶回復機能と、②翻訳者の意図により目標テキストがどのようなコミュニケーションを実現するかを方向付ける機能、つまり新たなコミュニケーション創出機能がある(藤濤, 2007: 111)。放送通訳の場合、これらの機能を註ではなく通訳の訳文に盛り込むことにより実現することになる(ただし、放送の時間的制約上、②の機能はほとんど認めにくいと言ってよい)。なお、①の機能に関しては、ナイダ(1972: 351)は次の項目を挙げている。

(1) 言語・文化的不一致の是正

例えば、(a)習慣の説明、(b)地理的・物理的事物の解説、(c)重量や容量の換算値、  
(d)言葉の遊戯の説明、(e)固有名詞に関する補足的解説

(2) 当該箇所理解のための背景知識の補足

さらに考慮すべきなのは、前出の三島・小倉(2000)には明示的に掲げられてはいないが、明示化の方略(上記 III.に対応)も「聞いてわかりやすい日本語」を実現するには必要である。この点、花岡(2000)は Blum-Kulka(1986/2000: 300)<sup>1</sup>の明示化仮説を引用したうえで、時差通訳における明示化現象を次のように分類している。

1. 談話の拡張—省略の復元、強調、情報の追加
2. 語彙レベルの明示化—代名詞による指示と語彙の反復、固有名詞の訳出(直訳、直訳+説明、簡略化、隠喩の説明)
3. 文化固有の事象の明示化
4. 実用的明示化
5. 文字情報の明示化
6. 意図せぬ明示化

最後に、上記 IV.に対応するものとして、英日のレトリックの違いの調整があるが、本稿は同時通訳を扱うため、この論点は等閑視してもよいだろう。

以上を概括すると、一般に通訳翻訳では「原文に忠実で」「わかりやすい訳文」が求められるが、前者は機能的通訳翻訳理論に基づく方略から、後者は通訳者の編集方略から導かれ、後者は訳出率の抑制、文化差の回復、明示化、レトリック調整、の4つがあることがわかる。但し、これらは「時差通訳」を想定したものであり、これが「同時通訳」にどの程度反映されているか、両者の違いを探っていく。

では、これらの先行研究を踏まえて、本稿が分析の対象にするABCの同時通訳と逐次通訳の比較基準を設定してみよう。

## 4.2 同時通訳と時差通訳の比較基準

ABC の同時通訳は前述のように事前に 1 度だけ聞く機会が持てる場合とそうでない場合とある。時差通訳の場合は一定の準備時間をかけてメモないし翻訳文を作ることが可能である場合がほとんどである。このような環境下では、同時通訳と時差通訳の決定的な違いは情報の「編集性」であると予想される。そこで、作業仮説として、以下の 2 つの機軸と 2 つの同時通訳方略に連関があると想定したうえで、後掲の(ア)～(キ)についてテキスト分析を行うものとする。まず、

1. 機能的通訳翻訳理論による方略の反映
2. 編集方略の採用(訳出率の抑制、文化差の回復、明示化、レトリック調整)

という大きな 2 つの機軸で分析を行い、産出された訳文テキストにどの程度「編集性」が関与しているかについて調べる。その手がかりとして、通訳者は同時通訳を行う際に、認知的・時間的制約<sup>2</sup>の中でどのように情報を編集しながら通訳しているのか、その背後にある通訳者の方略とその具体的な技法を調べる。同時通訳の方略に関する先行研究は多数あるが(Kirchhoff, 1976/2002; Kalina, 1992; Gile, 1995; Riccardi, 1996, 2005; Kohn and Kalina, 1996; Bartłomiejczyk, 2006; Zanetti, 1999; Setton, 1999; Al-Khanji, El-Shiyab and Hussein, 2000; Nolan, 2005)、本稿では同時通訳と時差通訳を対照的に論じるために、Niska (1999) が提唱する以下の 2 つの同時通訳の方略に基づいて対比的に分析をし、また染谷 (2002) が提唱するそれぞれの長所・短所とその克服技法も併せて検討してゆく。Niska (1999) と染谷 (2002) の概略は以下のとおりである。

- A. 即応方略 (immediate response; forcing type): 「すべて」訳出しようとするもので、ほとんど遅延することなく訳出を開始し、ほとんど強制的に早い速度で訳出を行う方略。このタイプに必要とされる通訳技法は「修復」「つなぎ」であるとされている。
- B. 遅延方略 (wait-and-see strategy; analytical type): 通訳を開始する前に数秒待ち、静かで落ち着いた速度で訳出を行う方略。このタイプに必要とされる通訳技法は「省略・圧縮・言換え・代用」などの情報編集技法であるとされている。

(以上、翻訳は筆者による)

即応方略では、短いチャンクごとに処理してゆくとため、認知的負担が比較的少なくて済む。ただし、情報が不十分な状態で訳出にかかることが多くなり、訳出開始を誤ったり、誤訳のリスクが高くなる。またチャンクごとのつながりが不自然になりやすい。したがって、このような短所を克服するために、「修復」と「つなぎ」の技法が用いられる。

他方、遅延方略では、待ち時間(情報量)に比例して認知的負荷が高くなる。ただし、情報が比較的十分にある状態で訳出にかかれるため、より正確かつ自然な通訳ができるようになる。したがって、このような認知的負担を軽減するために、「省略、圧縮、言い換え、代用」などの情報編集技法が用いられる。

即応方略を採ると、必然的に原文の流れに沿った訳出となり、機能的通訳翻訳理論が反

映されやすい。そして英日語の統語構造の違いを克服するために「修復」「つなぎ」の技法が多用される傾向がある。ところが情報の編集性が低いため、編集方略は採用されにくい。仮に重要でない情報を落としたとすると、それは時間的制約によるものと推論される。逆に、遅延方略を採ると、情報の編集作業が可能となるので、編集方略が採用されやすく、「省略・圧縮・言換え・代用」などの情報編集技法が多用される傾向がある。さらに、同方略を採ると、訳出しにくい表現や多義表現が文脈に照らしてその曖昧性が解消され、語義が確定しやすくなるといえる。

このように見てゆくと、同時通訳を行っている際に遅延方略を採ると、時差通訳に近い訳文産出結果が得られやすく、同時通訳と時差通訳との差異が少なくなる傾向にあることも推測されよう。

以上をもとに、以下の項目ごとに対象テキストをセンテンス単位で分析してゆくことにしたい。

- (ア) 保持された命題の保存率…編集方略の採用の程度
- (イ) 省略・圧縮・言換え・代用…編集方略の採用の程度
- (ウ) 修復・つなぎ…機能的通訳翻訳理論による方略の反映の程度
- (エ) 付加された推理・既知情報の追加・度量衡換算…編集方略の採用の程度
- (オ) 訳語選択に困る表現・多義表現の訳出・日本語らしい表現への転換…編集方略の採用の程度
- (カ) 特筆すべき語順操作・情報の配置…機能的通訳翻訳理論による方略の反映の程度
- (キ) インタビューカット・引用の明示…編集方略の採用の程度

即応方略が採られると(ア)保持された命題をすべて訳出する傾向がみられ、その短所を補償するために(ウ)修復・つなぎという訳出技法が多く見られると思われる。このようなある種の補償を行うために、時間的制約の中で些末な情報を落とすなど、ある種の縮小傾向への情報編集が行われるはずである。逆に、遅延方略に適合するのは(エ)(オ)であり、通訳者の情報編集性が高くなる。この場合は、認知負荷が高いなどその短所を補償するために(イ)省略・圧縮・言換え・代用という訳出技法が多く見られると思われる。(カ)については、順送りの訳出は即応方略、逆送りの訳出は遅延方略が採られていると思われる。そして、(キ)インタビューカット・引用の明示は時間的余裕のある遅延方略のほうに多く見られることが推測される。

## 5. 分析対象テキスト

本稿では 2008 年 6 月に放送された ABC の同時通訳と時差通訳から無作為に抽出した言語データを使用した(6 名の通訳者の 7 サンプル)。この時期に米国中西部で洪水の被害が相次ぎ、連日トップニュースとして報じられたため、主に洪水関連のニュースを分析することになった。ABC ニュースの同時通訳を担当している通訳者数名にインタビューしたところ、ハリケーンや大統領選など日ごろ話題になっている十分に背景知識があるニュースの方が、その日だけ取り上げられる医学や裁判などがテーマで内容が複雑なりポートよりも訳出しやすいという



意見が聞かれた。つまり、今回分析した「洪水」がテーマになっているニュースリポートはある程度予測しながら訳出が可能であり、他のニュースと比べると同時通訳しやすい内容と言えるであろう。

## 6. 分析の方法と結果

### 6.1 分析の方法

(ア)保持された命題の保存率は、センテンスを「命題(項と述語) + モダリティ」で構成されると便宜上考え<sup>3</sup>、原文の項・述語に相当する箇所1つを1として数える。原文の1つの項・述語に対応する訳文の箇所1つを1として数え、もし項・述語内部で省略や圧縮がある場合には、0.5とする。また、原文が1項であるところ、品詞転換などの操作により日本語としては2つ以上の項・述語になっているものも、項・述語としては1として数え、命題の保存率を同時と時差でそれぞれ比較する(以下では同時通訳を単に同時、時差通訳を単に時差と表記する)。and, but, so などの接続詞は項としてカウントしないものとする(また、項内部が等位接続詞で並列されている場合、並列された個々の要素を1として数える)。なお、今回の事例ではモダリティはほとんど問題にならないので、無視する。

#### (1)原文:Record rainfall and widespread flooding has ruined much of this year's crop.

同時:記録的な雨と洪水で今年の生産、ほとんど破壊されてしまいました。

時差:記録的な雨と広い地域での洪水によって収穫の多くが台無しになってしまいました。

分析:原文=5、同時=4.5、時差=4.5。同時では widespread flooding の widespread は前出の文脈および映像情報から既知な情報なので省略されている。逆に、of this year's crop の this year は時差では省略されている。

#### (2)原文:And that may well mean higher prices for everything, from what we eat to how we fuel our cars. (may mean が1つの述語扱い)

同時:これで価格が上昇します。食料費から燃料費までです。

時差:これによって食料品から燃料まで価格が上昇します。

分析:原文=7、同時=3.5、時差=3.5。higher prices は英語では項は1つだが、訳出の際に higher という形容詞を動詞に品詞転換した結果、項は2つになっている。しかし本稿は命題の保持率を分析するので、英語の1つの項に相当する情報は訳文でも1つの項として扱う。また from what we eat や to how we fuel our cars の部分は、情報が圧縮されているのでそれぞれ 0.5 とする。また、may mean, well, for everything は省略されている。

#### (3)原文:I'll stay until ankle-deep water. So, we're probably predicting about probably another three hours. (発言部分) ('ll stay が1つの述語扱い)

同時:あと3時間くらいは大丈夫だと思います。

時差:足首に浸かるまでやります。あと3時間くらいだと思います。

分析:原文=7、同時=2、時差=4。指示詞・代名詞に関しては、I, we はゼロ化<sup>4</sup>されている。probably predicting は同時・時差ともに「思います」と曖昧な訳語が選ばれている。また、同時は原文の言表にない「大丈夫だ」という訳語を文脈上選

扱って明示化しているが、時差では訳出されていない。I'll stay until ankle-deep water.は同時ではすべて省略されている。

以上のような要領で、今回抽出したサンプルから、さらに部分的に無作為抽出した計 714 語相当の英語原文とそれに相当する同時および時差の訳文について、項・述語の数を数え、数的調査を行った。

また、(イ)から(キ)の項目については、典型的な事例を挙げ、それに分析結果を付し、その背後にある通訳方略を探るといった質的調査を行った。また、(キ)に関しては今回抽出したサンプルすべてから引用箇所をすべて分析し、いくつかの分類に分けて、数的調査を行った。

## 6.2 分析の結果

### (ア) 保持された命題の保存率

【結果】項・述語の数：英語原文＝354、同時通訳＝218.5、時差通訳＝251.5

訳出率(和訳／英語原文)：同時通訳＝61.7%、時差通訳＝71.0%

一般的な傾向からすると、日本語訳のほうが項・述語の数が少ないのは、同時・時差ともに英語ニュースの定型表現を省略したり、日英語の言語構造の違いから不要部分を省略しているものがほとんどだからである。また同時よりも時差のほうが命題保持率が高く、認知的・時間的制約が大きい同時のほうが省略する頻度が高い。省略という点では同時のほうが多く、情報編集率が高い。

### (イ) 省略・圧縮・言換え・代用

(4)原文：There is not much trust between the two sides. They don't have confidence in themselves. And at the operational level, they're not coordinating at all. (パキスタン元国防大臣の発言部分)

同時：両国の間には信頼はほとんどありませんね。自信もなくなっています。作戦レベルでも互いに調整が取れていません。

時差：パキスタンの元国防大臣です。双方の間にはほとんど信頼はありません。作戦レベルでも全く調整が取れていません。

分析：時差では原文下線部が訳出されていない。これは非重要情報を落として大切な情報のみに絞り込んで発話者の言いたい趣旨を視聴者に明確化する効果を狙った編集作業だと思われる。逆に、同時では聞こえた情報はひとまず訳出しており、編集性は低いといえよう。

(5)原文：A flood of this magnitude will take a while to play out. The Mississippi River reacts quite slowly. And it'll take several days, if not weeks, before we settle back to normal in many of these sites. (気象学者の発言部分)

同時：ミシシッピ川は反応が遅いので、まあ数日はかかるでしょう。

時差：気象学者です。これほどの規模の洪水は時間をかけて広まります。ミシシッピ川の反応は遅いので、水が引くまでには数日はかかるでしょう。

分析:インタビューカットの部分なので、同時では非重要情報を落とし、要点のみ伝える訳出になっている(原文の下線部のみ訳出している)。この同時通訳は遅延方略が採られて時差の情報編集に近似しているといえる。ところが時差のほうは情報を網羅的に訳出している。

(6)原文:We're looking at sustained flooding levels for probably upwards of two to three weeks. (市のアシスタントエンジニアの発言部分)

同時:2、3週間はこういう状況が続くでしょう。

時差:市のエンジニアは水が引くには2、3週間はかかるといいます。

分析:「代用」のひとつのあり方として、同時では「こういう」という指示詞を用いて、映像情報を指標することによって本来訳出すべき情報の訳出の代用をしている。ところが時差では訳出している。

(7)原文:The corn that survived these floods is yellow and stunted.

同時:このとうもろこし、黄色で発育が止まっています。

時差:残っているとうもろこしは黄色で発育が止まっています。

分析:同時では「この」という指示詞によって映像情報を指標し、訳出すべき情報の代用をしている。時差ではこの部分を訳出しようとしている。

このように見てくると、一概に時差のほうが編集性が高いとは言えず、同時の場合も、どんな理由や動機が背後にあらうとも、省略・圧縮・言換え・代用などの技法により、編集性が高く、時差に近似していることも多いと言えよう。但し、指示詞による代用は同時のほうが多いことも確認された。

#### (ウ) 修復・つなぎ

(8)原文:And that may well mean higher prices for everything,/ from what we eat to how we fuel our cars.

同時:これで価格が上昇します。食料費から燃料費までです。

時差:これによって食料品から燃料まで価格が上昇します。

分析:この同時と時差は典型的な即応方略と遅延方略の違いが現われている例である。同時における即応方略では順送りで訳出し、「つなぎ」で対応したり、情報の「修復」を行ったりする。しかし、時差の場合は同時における遅延方略と同じで、情報の順番を逆送りで訳出することが多い(なお翻訳につき、Tanabe, 2008)。ここでは同時の「・・・までです。」の「です」が「つなぎ」に相当し、「費」という「価格」を意味する字が前出情報の「修復」に当たる。

このような順送り対逆送りの訳出順に関する顕著な違いが同時と時差で見られた事例(後出(14)も同様の事例)は少なく、その意味では同時と時差が訳出順に関してもそれほど顕著な差を示しているとはいえない。

#### (エ) 付加された推理・既知情報の追加・度量衡換算

「付加された推理や既知情報の追加」による「明示化」は、特定の1名の通訳者を除いてほとんど見られなかった。おそらく、前述のようにニュースレポートの原稿は推敲に推敲を重ねているため、無駄や冗長な部分、不鮮明な情報が極めて少なく、原文の解釈者たる通訳者がそこを補って明示的に訳出する必要は特にないものと思われる。

しかし、「度量衡や日付などの換算」(花岡, 2000 の言う、実用的明示化)に関しては、極めて事例が多い。例えば、a billion gallons を同時では瞬間的な換算は難しいので「10 億ガロン」と訳しているところ、時差では換算が可能なので「38 億リットル」と訳している。同様に、60 miles は同時では「60 マイル」、時差では「96 キロ」と訳している。あるいは、原文が yesterday となっているところ、同時では訳さないでいたものが、時差だと「15 日」と日付で明示化している事例もある。ところが中には、原文が six feet となっているものに関して、時差だけでなく同時でも「180 センチ」と訳していた。これは瞬時であっても比較的容易に換算可能であったからだと推察される。

以上見てきたように、花岡(2000)が指摘しているテキスト外情報のうち文化的事象を明示化する操作はあまり見られない。恐らく、花岡(2000)が扱っている分析対象は討論番組であり<sup>5</sup>、冗長性や曖昧な表現が多用され、日本の一般視聴者に対して文化的橋渡しを消極的ないし積極的に行うコミュニケーション断絶回復機能やコミュニケーション創出機能を果たす必要があるからだろう。他方ニュースレポートにはその余地があまりないのが特徴だと言える。以上から、度量衡換算においてのみ同時より時差のほうが編集性が高い、と言える。

#### (オ) 訳語選択に困る表現・多義表現の訳出・日本語らしい表現への転換

前出(1)原文: Record rainfall and widespread flooding has ruined much of this year's crop.

同時: 記録的な雨と洪水で今年の生産、ほとんど破壊されてしまいました。

時差: 記録的な雨と広い地域での洪水によって収穫の多くが台無しになってしまいました。

分析: まず、語彙レベルで問題となるのは、原文の ruin-crop の語彙的組み合わせをどう訳出するかである。同時では「生産、破壊された」、時差では「収穫が台無しになった」と訳されている。これはとうもろこしの話題であるので時差の訳出例のほうが曖昧性が解消されて(disambiguation)わかりやすい。制約の多い同時ではひとまず上位概念による置き換え的な訳出で切り抜けておいて、時差で適切な訳語を選択したと思われる。つぎに、統語レベルでは ruin (rainfall and flooding, crop)をどう日本語で事態構成(construal)するかである。原文は他動詞の能動構文、同時は他動詞の受動構文、時差は自動詞構文、となっており、後者になるほど言語類型上日本語的表現といえる(池上ほか, 1982)<sup>6</sup>。その意味で、わかりやすい表現を実現するために構文転換操作を行っている度合いが同時よりも時差のほうが強いといえよう。

(9)原文: Every Fathers Day the last three, four, five years, corn has been knee-high already.

And as, you look now, we only have just a couple inches here.

同時: 過去 3 年から 5 年の間は父の日にはとうもろこしの高さ、ひざまでありました。

時差: 過去 5 年間は父の日にはとうもろこしはひざの高さでした。今は数インチしかありません

ん。

分析: まず the last three, four, five years は同時では「過去3年から5年の間は」と原文の情報を保存する傾向があるのに対し、時差では圧縮して「過去5年間は」としているのので、この部分に関しては時差のほうが編集性が高い。

(10)原文: Any fool can have a child. That doesn't make you a father. It's the courage to raise a child that makes you a father. (オバマ氏の発言部分)

同時: みなさん子供を持っています。しかしそれで父親になれるわけではなりません。それで父親になるわけではないのです。実際に子供を育てて父親になるんですとオバマ氏です。

時差: 誰でも子どもは作れます。しかし、それで父親になれるわけではない。子どもを育てて初めて父親になれるんです。

分析: オバマ氏の発言の冒頭で fool という言葉が出ていて、その真意が俄かにつかみきれない箇所を同時では何とか切り抜けている。しかし、後続情報を訳出するなかでうまく発言の一貫性を確保する訳文を産出している。それに対して時差では一貫してこの発言部分の真意が伝わる訳出になっている。同時も時差にかなり質的に近似している例といえることは確かである。

(11)原文: Already the government is predicting a thinner harvest, sending future corn prices to record highs. That mean rising prices for corn-based products, everything from soda and chips to milk and beef from corn-fed cattle.

同時: とうもろこしの先物、既に記録的な高さになっています。これでとうもろこしに基づいたソーダやチップス、ミルクから食肉まで価格が上昇するでしょう。

時差: 政府は既に収穫の減少を予想しています。とうもろこしの先物価格は記録的な水準です。これによってソーダやチップス、牛乳から食肉まで値上がりすることになります。

分析: まず future corn prices to record highs は同時では「とうもろこしの先物、記録的な高さになっています」、時差では「とうもろこしの先物価格は記録的な水準です」とあり、時差のほうが正確ではあるが、同時でもうまく訳出している。corn-based products は同時では「とうもろこしに基づいた」と逐語訳風にして切り抜けた上で、時差ではその情報は視聴者にとって重要ではないと判断し、省略している。また milk は同時では「ミルク」、時差では「牛乳」と訳出している。これは文脈によっては「乳製品」「牛乳」「粉ミルク」など多様な訳語選択が可能であり、同時でそのまま「ミルク」と訳出したのもひとつの方略である。他にも、business を同時で「ビジネス」とカタカナで訳出しておいてその意味的曖昧性を曖昧なまま残しておいた上で、時差では語義を確定して「企業」や「店舗」と訳出している例が見られた。

(12)原文: Across Iowa, tonight, frantic efforts are under way to keep floodwaters at bay, and residents safe.

同時: アイオワでは何とか洪水を防ごうと色々な動きが見られています。

時差: アイオワでは水を止めようと、大変な努力が行なわれています。

分析: frantic efforts を同時では何か慌しくて必死の行為をやや抽象的な上位概念である

「動き」と訳出しておいて、時差では「努力」としている。

以上より、オンライン処理を強いられる同時では語彙レベルでは抽象的な上位語で切り抜けたり、あまり編集せずそのまま字義的に訳出する例がみられる。また統語レベルでは即応方略的な順送りの訳出が見られたり、時差と比べて構文転換操作を行うことが少ないなど、同時は時差よりも編集性は低い、概して、同時も時差にかなり近似した質の高さを確保している。

#### (カ) 特筆すべき語順操作・情報の配置

(13)原文: Parts of the Midwest are already suffering the wettest spring on record./ And at this point, there is little relief in sight.

同時: ほとんど状況が改善する兆しはみられません。中西部ではまた雲がかかっています。

時差: 中西部の一部の降雨量は既に過去最大になっています。そして改善の兆しが見られません。

分析: これは同時に特徴がある。この第1文は訳出を保留した状態に置いたうえで、先に第2文を訳出している。その間、第1文は保持していることが推測される。時差では第1文→第2文の順で訳出している。機能的通訳翻訳理論の立場からは、情報提示順に訳出するほうが原文のもつ情報配列機能が再現しやすい。この事例では、時差ではそれを維持している。

(14)原文: The name “Iowa” comes from an Indian word, meaning “beautiful land.” But in the eastern half of the state, you can't tell if much of the land is beautiful. It's under water.

同時: アイオワと言う言葉は先住民の言葉で、美しい土地と言う意味です。しかしアイオワの東部では美しいかどうかもうわかりません。水没してしまっているからです。

時差: アイオワはアメリカ先住民の言葉で美しい土地と言う意味ですが、アイオワ州東部は水没していて、もはや美しいかどうかはわかりません。

分析: これは洪水に関するニュースの冒頭で、原文における情報の焦点は *It's under water.* である。つまり、まずトピック提示として場所に言及指示し、そこから本題に入る、というズームイン的描写法を採っている。そして、ここで *It's under water.* という情報を提示した上で、後続部分で洪水の情報を伝える、という情報の流れである。これを目標言語で再現すると、原文の語順提示順に従っている同時の例のようになる。しかし、時差は情報を編集して第2文と第3文を統合している。

以上から、原文の情報配列を操作すると、目標言語上は異なった効果が出るのがわかる。

#### (キ) インタビューカット・引用の明示

計 42 箇所のインタビューカットないし発言の引用が見られた。詳細は以下のとおりである。

訳出が行われているかどうか (計 42 件中)

(ア) 同時・時差ともに訳出なし	4 件
(イ) 同時・時差ともに訳出あり	35 件
(ウ) 同時で訳出あり、時差で訳出なし	1 件

(エ) 同時で訳出なし、時差で訳出あり 2 件

発言者に関する情報を言語化\*しているかどうか(同時 36 件、時差 37 件中)

- 同時で発言者の説明を施している 5 件
- 時差で発言者の説明を施している 8 件

\*例えば、「気象学者です」と付け加えて発言部分を訳出する場合をいう。

他方と比べて著しく命題保持率が高いもの(計 42 件中)

- 同時が時差より著しく命題保持率が高い 4 件
- 時差が同時より著しく命題保持率が高い 15 件

以上より、インタビューカットないし発言の引用を訳出するか否かの判断は、同時と時差ではそれほど差がない。また、発言者に関する説明の言語表現化は、情報の編集時間が十分ある時差のほうが多い傾向がある((4)の時差の「パキスタンの元国防大臣です。」の例)。さらに、同時より時差のほうが命題保持率が高い。これを個別事例で仔細に検討すると、(1)同時のほうが命題保持率が高い場合は、同時だと時間的に編集すべきか否かの判断がしづらく、ひとまず訳出するという方略に出たものと思われる(例えば(10)は文意が即座には理解しにくい原文の発言箇所なので、すべて訳出するという即応方略を採っている)。または逆に時差の場合、オリジナルの映像と音声に対応させる(尺調整)ために時間を短縮化する必要があるため、非重要情報は落とすという方略を採ることもある((4)の時差の例)。あるいは時差で事前に用意した原稿の情報量が全体的に多すぎ、インタビューカットの部分を訳出しないことによって尺の調整をしているものと思われる。(2)時差のほうが命題保持率が高い場合は、時差の場合だと時間をかけて訳文を練った結果、情報を落とさず訳出できるからである。しかし、同時だと認知的・時間的制約により、ある程度非重要情報は落とすことが多い((5)(6)の同時の例)。このように見えてくると、インタビューカットや引用部分に関しては同時も時差も大差はないが、同時の場合、認知的制約上、訳出率が高くなったり、逆に時間的制約上、縮小化の傾向が見られるのに対し、時差の場合は、原則的には原文の情報を省略・圧縮することなく、訳文を練りながら聞き手にとって正確でわかりやすい訳出をする傾向が強いが、時として尺調整のために情報を縮小することもある。

### 6.3 分析結果のまとめ

以上から、同時の場合、オンラインで処理するという認知的・時間的制約下で、原文自体が曖昧でわかりにくい表現をとっている場合は、時差に比べて極めて不利な立場にあるために曖昧な訳語選択になることもあるが、その他の場合は、同時でも時差でもそれぞれに編集性があり、同時でも時差に匹敵する訳文の質の確保がなされていると見てよいだろう。その際の方略として、同時ではオンラインで処理するために即応方略で対応し、時間的な制約上、原文をすべて網羅的に訳出できない場合は、非重要情報を省略したり、インタビューカットの部分を訳出しないなど、尺の調整を適宜行っている。また適宜、遅延方略を採って情報を取捨選択しながら編集作業を行いつつ訳出する事例も見られ、命題保持率は時差のほうがや

や高いものの、同時は時差に迫る質を確保しているといえよう。

## 7. 結語と今後の課題

今回はニュースレポートに関する同時通訳と時差通訳の比較対照を試みたものであるが、端的に言うと、時間的にも認知的にも非常に負荷のかかる同時通訳がこれほど時差通訳に近似した質を確保するレベルに達していることは注目すべき事実である。しかし、オンライン処理を強いられる通訳環境下で、情報内容の密度が高いニュースレポートの同時通訳には克服しなければならない問題もあり、本稿はそのための方略化を行うための記述研究という位置づけである。

同時通訳の多用化が目立つ中、CNN では再放送される一部番組に時差通訳で対応するようになり、BBC でもドキュメンタリー番組を中心に日本語字幕番組を強化する方針が明らかになり、ニュース専門チャンネルでの同時通訳の多用化傾向に変化が見られる。視聴者側の声も反映させながら、今後の放送通訳における同時通訳の位置づけにも引き続き注目し研究を進めていきたい。

---

### 著者紹介:

稲生衣代 (INO Kinuyo) 青山学院大学准教授。タフツ大学フレッチャー・スクール法律外交大学院修了。日本通訳翻訳学会通訳教育分科会幹事。専門は、通訳教育・映像翻訳・放送ジャーナリズムにおける通訳論。

河原清志 (KAWAHARA Kiyoshi) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士前期課程修了。現在、東京外国語大学・大学院、青山学院大学、麗澤大学、陸上自衛隊英語通訳コース等の非常勤講師。日本通訳翻訳学会通訳教育分科会幹事。専門は、通訳学・翻訳学・認知言語学・英語教育学。

---

### 【註】

- 1) 「冗長になるのは結束性の明示レベルが上がったためだと言える。この主張を『明示化仮説』と表し、二つの言語体系・テキスト体系の相違に起因する増加分とは別に、翻訳では結束的明示性が守られる」(翻訳は藤濤, 2007: 80 から引用)。
- 2) 同時通訳の認知的負荷に関し、努力モデル(Gile, 1995, 1997, 1999)等参照。
- 3) Fillmore (1968)に基づいてセンテンスの構成要素を示すと、 $S=P+M / P=Pred. + Arg.1 + Arg.2 + \dots + Arg.n$  (S:文、P:命題、M:モダリティ、P:述語、Arg.:項)となる(阿部, 1995: 162)。なお、モダリティの定義はかなり争いがあるので、本稿ではさしあたり、日英語ともに<発話時点における話し手の心的態度>(中右, 1994)としたうえで分析した。
- 4) 認知言語類型論からは、日本語の代名詞はゼロ化されていると考えられている(なお、中村, 2004)。



- 5) 対談や討論の場合、テキストの言及指示対象はテキスト外の事象だけでなく、発話出来事か起きているオリゴに生起する発話それ自体に言及するため (reflexive calibration、Silverstein, 1993; 河原, 2008)、照応させるある種のメタ言語的言語装置が多用されがちなことが理由の一つだろう。これは発話済みのテキストについてメタ・テキストにより自己言及 (reflexive) する構造があり、したがって花岡 (2000) の言う談話の拡張や語彙レベルの明示化 (特に代名詞による指示対象の明示的言語化) はしばしば起こりうる。ところがニュースリポートはテキストのコンテキストに対する依存性が低く、オリゴ外の事象につき言語化する (reportive calibration) ための元々のテキストが明瞭に書かれていることが多いので、本稿の分析対象では花岡 (2000) の結果とは異なった結果が出ていると思われる。
- 6) <他動詞・能動構文－他動詞・受動構文－自動詞構文>は、後者になるほど動詞の他動性が弱まり、有界的なモノとモノとの因果関係の連鎖が動詞によって示されるという構文から、参照点を提示し、その場で起こった出来事を標的と自動詞によって表すという構文へと、グラデーションが見られる。同じ出来事に関して、有界性を特徴とする英語はモノ同士の因果律が他動詞の能動構文によって、無界性を特徴とする日本語は自動詞構文によってコト的に事態構成する傾向がこの事例から読み取れる (池上ほか, 1982: 94-107)。

#### 【参考文献】

- Al-Khanji, R., El-Shiyab, S. and Hussein, R. (2000). On the use of compensatory strategies in simultaneous interpretation. *Meta*, 45 (3): 548-557.
- Baker, M. (1992). *In other words*. London: Routledge.
- Bartłomiejczyk, M. (2006). Strategies of simultaneous interpreting and directionality. *Interpreting*, 8 (2): 149-174.
- Blum-Kulka, S. (1986/2000). Shifts of cohesion and coherence in translation. In Venuti, L. (Ed.). *The translation studies reader*, 298-314.
- Fillmore, C.J. (1968). The case for case. In E. Bach and R. T. Harms (Eds.). *Universals in linguistic theory*. Orlando, Florida: Holt, Rinehart and Winston.
- Gile, D. (1995). *Basic concepts and models for interpreter and translator training*. Amsterdam: John Benjamins.
- Gile, D. (1997). Conference interpreting as a cognitive management problem. In Danks, J. H. et al. (Eds.). *Cognitive processes in translation and interpreting*. Thousand Oaks: Sage Publications.
- Gile, D. (1999). Testing the effort models' tightrope hypothesis in simultaneous interpreting— A contribution. *Hermes, Journal of Linguistics*, 23: 153-172.
- Kalina, S. (1992). Analyzing interpreters' performance: Methods and problems. In Dollerup, C. and Lindegaard, A. (Eds.). *Teaching Translation and Interpreting*. 2: 225-232.
- Kirchhoff, H. (1976/2002). Simultaneous interpreting: Interdependence of variables in the interpreting process, interpreting models and interpreting strategies. In Pöchhacker, F. and Shlesinger, M. (Eds.). *The interpreting studies reader*. 110-119.

- Kohn, K. and Kalina, S. (1996). The strategic dimension of interpreting. *Meta*. 41 (1): 118-138.
- Niska, H. (1999). *Text linguistic models for the study of simultaneous interpreting*. [Online]  
<http://www.geocities.com/~tolk/lic/LIC990329.htm> (Sept., 23, 2008)
- Nolan, J. (2005). *Interpretation: Technique and exercises*. Bristol: Multilingual Matters.
- Riccardi, A. (1996). Language: specific strategies in simultaneous interpreting. In Dollerup, C. and Appel, V. (Eds.). *Teaching Translation and Interpreting*. 3, 213-222.
- Riccardi, A. (2005). On the evolution of interpreting strategies in simultaneous interpreting. *Meta*, 50 (2): 753-767.
- Setton, R. (1999). *Simultaneous interpretation: A cognitive-pragmatic analysis*. Amsterdam: John Benjamins.
- Silverstein, M. (1993). Metapragmatic discourse and metapragmatic function. In Lucy, J.A. (Ed.). *Reflexive language: Reported speech and metapragmatics*, Cambridge: Cambridge University Press. 33-58.
- Tanabe, K. (2008). Reverse or sequential - Japanese school translation and language learning. CD-Rom proceedings for 2008 FIT, Shanghai.
- Zanetti, R. (1999). Relevance of anticipation and possible strategies in the simultaneous interpretation from English into Italian. [Online]  
<http://www.openstarts.units.it/dspace/bitstream/10077/2214/1/05Zanetti.pdf> (Nov. 11, 2008)
- 阿部純一 (1995) 「文の理解」, 大津由紀雄[編]『認知心理学3:言語』東京大学出版会 159-171.
- BS 放送通訳グループ (1998) 『放送通訳の世界』アルク
- 藤濤文字 (2007) 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション—機能主義的翻訳理論の諸相—』松籟社
- 花岡修 (2000) 「放送通訳における明示化の方略」『通訳研究』特別号: 69-84.
- 池上嘉彦ほか (1982) 『日英比較講座第4巻:発想と表現』大修館
- 稲生衣代 (2003) 「放送通訳の変遷と通訳・翻訳手法に関する考察—CNN 二カ国語放送を例に」『通訳研究』第3号: 54-69.
- 稲生衣代 (2007a) 「同時通訳を選ぶとき—訳出形態の選択に関する考察—」『英文学思潮』第80巻: 71-92.
- 稲生衣代 (2007b) 「授賞式の二ヶ国語放送からみたメディア翻訳」『翻訳研究への招待』第1号: 45-55. 日本通訳学会翻訳研究分科会[編]
- 貝瀬千章 (1993) 「放送英語ニュース上の諸問題」『明海大学外国語学部論集』第6集: 31-42.
- 河原清志 (2008) 「ことばの意味の多次元性: “as”の事例研究」立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科修士論文
- 木佐敬久 (1993) 「同時通訳の日本語 視聴者はどう受けとめているか」『放送研究と調査』1993年3月, 28-39.
- 三島篤志・小倉慶郎 (2000) 「放送通訳の訳出ストラテジー」『The JASEC Bulletin』第9巻第1

号: 18-30.

- 水野的 (1997) 「機能的翻訳理論への序章」『通訳理論研究』第 8 卷 1 号, 50-77.
- 中村芳久 (2004) 「主観性の言語学: 主観性と文法構造・構文」『認知文法論 2』大修館, 3-51.
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館
- ナイダ, E.A. (1972) 『翻訳学序説』(成瀬武史・訳) 開文社 [原著: Nida, E. (1964). *Toward a science of translating, with special reference to principles and procedures involved in bible translating*. Leiden: Brill.]
- 西村友美 (1999) 「時差通訳のストラテジーと言語認知」『京都橘女子大学研究紀要』第 26 号, 69-84.
- 小倉慶郎・三島篤志 (1999) 「放送通訳をめぐる諸問題」『The JASEC Bulletin』第 8 巻第 1 号: 1-10.
- 柴原智幸 (2003) 「放送通訳をつけたニュース番組に対する需要の変化と今後の展望」『通訳研究』第 3 号: 70-81.
- 染谷泰正 (2002) 「通訳訓練教材データベース」(立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科「通訳教育方法論」2004 年度授業配布資料)
- 土屋三千夫 (2007) 「地上デジタル放送情報」  
[Online] <http://www.nhk-jn.co.jp/012chideji/topics/2006/053/053.htm> (Aug., 31, 2007)
- 鶴田知佳子 (1997) 「英語テレビニュースの放送通訳—ある ABC ニュースに関する一考察」『目白学園女子短期大学研究紀要』第 34 号: 115-133.
- 鶴田知佳子 (2004) 「放送通訳における訳語の選択—イラク戦争報道の例—」『目白大学人間社会学部紀要』第 4 号: 173-188.

